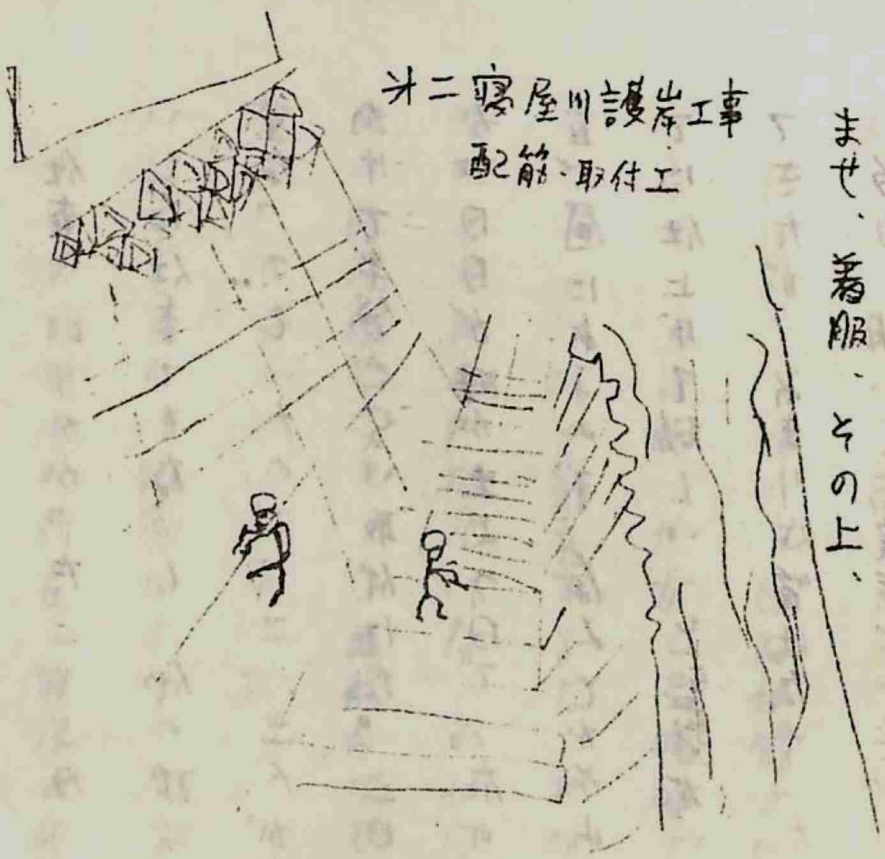
# 一億円着服…倒産業者
## 笹原建設とのおつきあい

一億円着服業者とのおつきあいといっても、別に分け前をもらったわけではなく、その現場で働いたというだけの話。

三月七日の読売新聞によると、笹原建設は高知の森組と共同企業体をつくり、府営「長吉ポンプ場工事」と「第二寝屋川護岸工事」を総工費計三億二千六百五十万円で請け負った。ところが、笹原は、両工事の前渡し、中間金計一億四千五百七十四万九千円を自分の隠し口座に振り込ませ、着服、その上、



昨年五月に約七千万円の手渡り手形を出して倒産している。

私が仕事をしたのは「第二寮屋川護岸工事」の方で、仕事は大して難しいものではなく、弱っている護岸の上に鉄筋を組んで補強するというもの。百二〜三十メートルの区間が幾つかあって、その一区間をやった。

こう書くとなんと言うことのない話なのだが、この工事中にめずらしいもめごとがあった。

仕事に取りかかった二、三日、たいした仕事でもないし、他の現場と重なってもいたので、二、三人が出かけて半分ぐらい取付けた。三日目か四日目が確か土よう日で、麻の検査が屋にあるので、なんとかそれまでに仕上げて欲しい、と監督がいってきたが、あまり成算はなかった。

当日、朝から雨模様だったが、六人ほどがしかたなく現場に出ると、見知らぬ鉄筋屋が十数人いた。話を聞くと、笹原が間に合いそうもないと思って、浦に頼んで手を借りたということだった。

私としては、仕事さえかたづければいいので、一緒に仕事していたが、後からオヤジが来て、突然、材料を引き上げる。みんなあがれ、という。

多分、浦から来た人間の賃金をだめが持つかでもめたのだろう。

困ったのは私達で、本当に結束をバラして鉄筋をはずすべきかどうか、雨の降りもひどくなってきたので、しばしぼうぜんとしていた。



その点、浦から来た人は、笹原の人間と出面の保障と歩の話をつけるとはいい、さようなら、と帰ってしまった。

半月ぐらい後で、白石鉄筋がヒマになり、浦に行ったが、この時、頭(アタマ)ができていた人と話をすると、あの本隊の中におった人かいな、わしらはあのときは、ちょっとしぬれたけで元日したで、といっていた。

損をしたのは私達だけ。

オヤジと笹原の所長、笹原の仲人

である辻野組の監督が雨の中で話をしているのを、車の中で結論が出るまでまっていた。

わしゃ、この現場が最後で会社をやめるんや、命かけとるんやで、同じ仕事師ならわかるやろ、うじゃうじゃ言うとらんと腹、立つんやったらわしをなんぼでも殴らんかい。仕事を放り出すことないやろが、と笹原の仲人、

よしゃ、材料引き上げるいうやったら、今すぐ引き上げんかい、こっちも後の段取りがあるや、今すぐ引き上げてみい、腹くくって物言うとるんやろな、と笹原の所長。

最初の勢いはどこえやら、ムニャムニャのオヤジ。

結局、金の話はどうなったかしらないが、勘定に引き続き雨の降る中、仕事をさせられた。

護岸工事の最終工程は、護岸の上のコンクリ壁の補強だったのだが、それに取りかかる前に笹原が倒産してしまった。その時点で私は浦に行



ったのでよく知らないが、オヤジは辻野から金をもらって頂けなく、仕事も完成させたそうだ。

## また倒産業者と…

白石鉄筋に仕事がなくなって浦に身をかわしたが、年末のおしせまった頃から浦に仕事がなくなり、どうしようかと考えていると、白石鉄筋の方は仕事がある、との情報。渡りに船でまい戻った。

ところが、今月に入って、得意先が一軒夜逃げ、二月から日当の支払いが遅れがちだったのが、もうひとつきつくなって、三月に入ってからというもの、まだ一日分ももらっていないしまつ。

今は金に仕事がなく、渡る船の見当がつかない。

浦興業は、昨年の忙しい時期には百七十人から二百人近くを送り出していたが、三月に入ってからは十人ぐらい、名に減っている。

現金仕事も似たようなもので、N

組は百三十人ぐらい出していただのが三ヶから四十人ぐらいになっている。

仕事があまっているのは、転の斡旋をしないあいりん転宅がデしかくしに、アリバイとして使うあいりん転宅分室ぐらいなものだ。ここだけは看板がいつも残って、アブレの支給を受けられないそうだ。それというのも、あまり条件が悪く、安い仕事ばかりなので、いくら仕事がない、と言っても行く気がしない、と人が集らないため。無能転宅はこれをして、仕事は充分ある、あまるほどある、と言うのではあるまいな。

ともかく、大手建設業者の団体までが、今まで景気の調整役に我々はさんざん利用されたし協力もしてきた、今になって、公共事業をおさえるなんて言わせない。聞きたくもない、もっと出せ、と声をはりあげているほど仕事がない。

仕事のあるなしを国、公共事業の多少に左右されるとはなんとなく情けないが、どうにかしたれや、ホンマニ、(ヤジ馬)